

教師論の過去と現在 その2 — ソクラテス

高橋 康造[†]・内海 隆^{††}

Ideal Teachers, old and new — 2. Socrates

Kozo TAKAHASHI[†], Takashi UCHIUMI^{††}

ABSTRACT

A Greek philosopher, Socrates, often uses his experimental method in thought when dialoguing with other people. This method has two phases, i. e. one refuting an interlocutor's opinion, and another one making him discover some truths. By using this method, he urged interlocutors to be liberated from conventional beliefs or opinions and think afresh for themselves thoroughly. They could come up to the truths to a certain degree, if not to a head. And with his help they sometimes got to think out philosophically on their own.

Key Words: Socrates ; Plato ; Educator ; experimental method

キーワード: ソクラテス, プラトン, 教師, 思考実験

はじめに

前稿で検討したコメニウスの教授理論では、その体系的な教授過程、つまりカリキュラムに沿って教師は教えることになるが、教師ソクラテスはその対極に位置づけられるように思われる。何しろソクラテスの対話相手が話題提供することから論議が展開したり、ソクラテスが対話を主導しているときでも、相手の応答次第で議論の方向が変わるからである。しかしだからといって対話は単なる“行き当たりばったり”的な無方向性の体(てい)をいささかもとらない。対話においてソクラテスは単なる一人の話し手に留まっていない。少なくともプラトンの

伝えるところによれば、彼はいわば対話のコーディネーターであり、何からかの主題が論議されているとき問題の所在に関してすでに通曉していて、議論の舵取り役を演じることができた、とされている。

『ソクラテスの弁明』には、ソクラテスは自分が教師であることを自認していない箇所がある(Apol. 33a)¹⁾が、それは彼がソピステースのように教えることを生業としているような教師ではない、ということを主張しているに過ぎない。実際彼は対話を通して人びとに真理を獲得するように促す教師であった。『テアイテトス』でプラトンは、ソクラテスを真理を産み出すのを介添えする教師として、真理の「助産術」を心得た教師として描いている(Theaet. 148d ff.; 157c f.)。しかしソクラテスは真理探究を人びとに促すばかりか、彼自身探求者であったというのが実情だったろう。ただ世間では、彼の破壊的側面

平成23年1月14日受理

[†] 八戸工業大学土木建築工学科・教授

^{††} 八戸大学・教授

ばかりが強調されていた。つまり人びとのドクサを暴き、その無知をさらけ出す、という。

しかしこのような破壊的側面のみ強調されていたのに対して、プラトンはその対話篇を通してソクラテスの生産的な側面に光を当てようとしたと考えられる。ただ、いわゆる“歴史的ソクラテス”の言行をもとにプラトンが書いた初期対話篇では、ほとんどが結論先送りという形で終わっていることから、そこには生産的側面が欠落しているかのように解釈する立場もあるが、我々の見解はこの立場をとらない。結論が先送りされたとしても、それぞれの対話が“実りなき”ものだったとは見なすことができないからである。初期対話篇にあっても、対話の主題は倫理学の根本問題に関わる難題であったことから、軽々に決着をつけることが出来ないばかりか、そうすべきではない — このようにソクラテスまたはプラトンが判断したと考えられる。

ソクラテスは対話においてよく“思考実験”を行っている。かなりきわどい思考実験も散見されるが、我々の見方ではここにこそ教師ソクラテスの生産的な側面を見出すことができよう。ただしこの思考実験が必ずしも有効とはいえないようなものもあった。とりわけ場合分けの不十分なことが少なくなかったのである。この点は以下でプラトンの初期対話篇の事例で確認することにする。

第 1 章 歴史的背景

すでにソクラテスの生きた時代については多くの歴史的な事実が語られているので、本稿の論述にとり必要と思われる点についてのみ歴史的な背景を略述しておく。

ペルシャ戦争が終結し (479 BC)、477 年にアテネを盟主としたデーロス同盟が結成されている。このあたりに (c. 470 BC) ソクラテスが生まれている。これ以降 431 年のペロポネソス戦争開始までがアテネの全盛時代といってよいだろう。この

戦争以降アテネは転げ落ちるように政治経済的に凋落傾向を示す。404 年にスパルタに敗れたアテネにはその傀儡政権である 30 人政府が成立するが、この政権での首領格がプラトンの親戚筋に当たるクリティアースで、彼は恐怖政治の首謀者でもあった。彼はかつてソクラテスの弟子とされた人物で、このソクラテスに対して或る富豪を逮捕するように命じたが、ソクラテスはこれを断っている (Apol. 32c f.)。この政権が短命でなかったならば、ソクラテスは逮捕され処刑されていたであろうが、翌 403 年 5 月に 30 人政権は民主派に打倒され、アテネには民主制が復活した。その指導者の一人がアニュトスで、彼はソクラテス告発の首謀者であった。ソクラテスが民主制に批判的であったことが告発の背景にあったと考えられる。

さて当時のアテネ民主制の特徴をおさらいしておこう。僭主制 (tyrannis) の打倒の後に民主制が樹立され、あらゆる面で市民に平等な権利 (発言権 *ισηγoria*) が与えられたが、このように僭主の支配から解放されて、民主制が確立されるやアテネは最強国となった、とはヘロドトスの見解である (Herod. 5, 78)。このような民主制の積極的な意義は、ソクラテスのさまざまな発言の中に見出すことは困難である。評議会の議員をはじめさまざまな官職が籤で選ばれること自体、ソクラテスには不満であった。将軍職を除いて、ほとんどの官職は任期が一年で、しかも再任不可だったので、たとえば行政手腕のある人物がその能力を発揮して一年以上その任に当たることも出来ない。

裁判制度についても言及しておく必要がある。まず検察や弁護士が法廷に立つといった制度がなかったことが挙げられる。つまり、それぞれ証人を立てることはできたが、原告と被告の一騎打ちが基本で、これを 500 人ほどの陪審員たちが評決を下すことになる²⁾。告発するほうも弁護するほうも、まさしく演説者のように大音声で発言しなければならない。また刑事事件や民事事件が法廷で争われただけではない。そこは政敵を打倒するための舞台にもなった。

アテネは訴訟社会と言われることがあるように、盛んに裁判がなされたが、その背景には告発者が勝訴した場合、罰金や没収された財産の一部を報酬として受け取ることが出来るといった仕組みがあった³⁾。ただし濫訴を防ぐための仕組みがあったことは、『弁明』で示唆されている (Apol. 36a f.)。つまり原告側が5分の1以上の評決を得なければ、1000 ドラクマの罰金が課せられたのである。いずれにせよ、アテネにおいて話べたは「命取り」になりかねない、といったことは誇張ではない (太田 46 ff.)。

このような背景の下に弁論術の教師が智者 (ソピステース) として登場し、人々は高額授業料を払ってでも、その教えを乞うことがあった (Apol. 20b f.)。プラトンの対話篇に登場するソピステースや弁論家または弁論術の教師は、我々の知る限りすべて外国人であった。『パイドロス』篇に登場する教師たちの出身地を挙げるだけでもこのことが分かる⁴⁾。弁論術関連の教科書のようなものが出回っていたこともこの対話編で示唆されている (Paedr. 266d)。

最後に、ソクラテス自身も従軍したことのあるペロポネソス戦争に触れておく。この戦争を詳述したトゥーキューディデースの『戦史』にはその当時の道徳観が変質してしまっているさまが描かれている。その典型例がメーロス島事件である。大国となったアテネは文字通り“強者の論理”で押し通す。「強い者が多くをとる」 (Gorg. 483d; cf. Resp. 338c)、あるいは強者が弱者を支配するのが当然、という論理はプラトンの『ゴルギアース』でも論議されているが、まさしくこれと同じ論理でアテネは、アテネへの隷属を拒否しようとしたメーロス島の成人男子全員を殺害し、婦女子を奴隷として売りとばし、この島にアテネ人を住まわせることになった (Thuk., V, 116, 4)。力のある者が弱い者を支配するのは「自然の定め」 (φύσεως ἀνάγκη) といった思潮がまかり通り、まともな正義論は葬り去られた (Thuk. V, 105, 2)。またこの戦争でソクラテスの弟子とされたアルキビアデースが、アテネの敗勢を決定付けることになるシチリア遠征の提

案をし、また祖国を裏切ってスパルタ側に就いたりしたが、これについてもトゥーキューディデースに詳細な記述がある。

第2章 助産術

2.1 助産術の二側面

ソクラテス是对話を通して何らかの真理探究を行う場合、単に論理上の矛盾を指摘したり、何らかの思い違いを根拠なきものとして退けることをまず行う。しかし当然ながらこれで終わるのではない。ソクラテスは相手を論破するだけで対話を止めたのではない。しかし世間ではそう取られていた節があることは、「ソクラテスの弁明」で示唆されている。議論相手をやりこめて、その無知ぶりを暴いたことでソクラテスは憎しみをかい、告訴されるまでに至った、と (Apol. 23b)。しかし同じ「弁明」で彼は自分が真の意味である人々を「幸福」にしたと自負している (Apol. 36d)。

ソクラテスの破壊的・消極的側面と生産的・積極的なそれについて、教師ソクラテスをほぼ網羅的に研究した村井実 (『ソクラテス』、上、下) の見解をまとめておこう。

村井 (下 71 ff.) によると、対話術、すなわち真理を生み出す助産術は二つの局面に分けられる。一つは論破 (elegkos elegkos) で、もう一つは文字通り「助産」 (μιαευσις) である。論破により真理産出のための陣痛を起こさせ、助産により対話相手の真理産出に助力するわけである。しかし村井によれば、ソクラテス対話篇で無事出産を遂げた事例は唯一『メノーン』篇での成功例のみで⁵⁾、残りの対話篇にあってはソクラテスの助産術、つまりその対話術は生産的ではなかった、とされる。「生産的な瞬間の到来が必ずしも保証されていないというところにソクラテスの最大の問題点が」あった、というわけである (村井、下 95)。『メノーン』以外でのソクラテス対話篇で助産はすべて“流産”に終わったとは村井は述べていないものの、その

「生産性」に関してはそれは否定的に判定されている。我々の立場は、ソクラテスの助産術による出産は“難産”だったかもしれないが、決して流産ではなかったというものである。ただしその生産性にも高低があったと言えよう。単に相手をアポリアに、つまり出口なしの状態に陥らせただけでは、最低の生産性しか得られないが、ソクラテス是对話相手を日常的自明性の域を超えて、認識の一定の高みにまで誘うことが少なからずあった、というのも我々の見解である。

2.2 思考実験と対話の衝撃性

ソクラテスの対話は単に論駁をことにしたのではないことはプラトンの対話篇で、またクセノフォンの『思い出』で直接、間接に保証されている (X-Mem. ex. II, 1)。しかし『弁明』で示されている告訴状ではソクラテスがソピステースのように「弱い論理を強い論理に」する危険人物として描かれている。人々を、特に若者を“言いくるめ”て墮落させた人物、アテネの伝統的な価値観を破壊する、たちの悪い人物 — これが世間の一般的な評判だった (Apol. 18b ff.)。

ソクラテスはその対話においてさまざまな思考実験を行っている。そのことを通して相手の「思い込み」(δόξα)を論駁し、日常的自明性から飛翔して思惟することへ誘導する。ただしこの思考実験ではときとして強引とも思われる前提をもとに対話が展開することがあった。対話が実際のところアポリアに陥っている場合、ソクラテスはこれに気づいて前提そのものを廃棄する場合と、気づかずに誤った結論に導いてしまうこともあった。彼が問題にしたのがいずれも倫理学の根本に関わるものであっただけに、この哲学者にそもそも完璧な対話術を期待するわけにはいかないし、その必要もなからう。

プラトンはときどき“劇的な”対話風景を描いてみせる。その典型例が『ゴルギアース』対話篇ではカリクレスとソクラテスのやりとり、『国家』篇ではトラシュマコスとのそれである。世間ではずるい奴がうまく世渡りして、実力以

上の境遇にあるといった事例が枚挙に暇がないほど；これが世の中というもの — 道徳規範の存在理由すらも無化するようなかかる挑発的な言論、たとえばカリクレスが展開するような主張は、対話の衝撃的な局面を前景に押し出しているように見える。仮面を脱ぎ捨てた人間の欲望、自分かわいさを原理とするホップズの的な人間的“自然”があからさまに表明され是認されるからである。なるほどこのような是認が劇的性格をもたらす大きな要因であることは誰しもが認めるところであるが、それ以上に“劇的”だったのが、我々の見方では、ソクラテスの思考実験だったのである。

たとえばカリクレスらの急進的な見解は、彼自身は当然のことと主張しているように、多くのアテネ市民が自覚的でないにしろ、共有していたもののなのである。それに対しソクラテスの思考実験は、よくその対話相手の反応に見られるように、突飛とも思えるような切り口で対話の新しい局面を切り開いていく。ほとんどの場合まず卑近とも思われる当り前の事例から始めるのが常である。たとえば強者または優れた者は法や習性、つまりノモス (νομος) の点でその欲望を抑制するように定められているけれども、自然 (φύσις) 本来の点では欲望を限りなく満たすことが可能であるばかりかそうする権利があり、この欲望充足で幸福な生を送ることができるといった主張に対して、ソクラテスが搔くてしょうがない皮膚病患者が思う存分搔くことができればそれこそ彼は幸福者ということになろう、といった予想だにしない反証を挙げる。彼は対話相手 (カリクレス) にとっては「度肝を抜く」(εκπληττειν) ような突拍子もない (ατοπος) 人物に映るわけである (Gorg. 494d ; cf. Symp. 221e)。

以下、これらの点を具体的に初期対話篇のいくつかを検討することで確認してみたい。本稿では紙数の制限もあり、“教師”ソクラテスの具体的な営みについては、『リュシス』と『ゴルギアース』に焦点を当てることにした。しかし『ソクラテスの弁明』、『クリトーン』、

『パイドーン』や『饗宴』といった初期対話篇を常に視野のうちに置きつつ、その対話術を通しての教育の営みについて、その是非を検討してみる。

第3章 対話篇における思考実験

3.1 『リュシス』に見る思考実験

『リュシス』はプラトンの最初期の作品として、“歴史的ソクラテス”の言行を再現していると考えられる。この対話篇の主題は、後世に「友情について」という副題が付けられているように、友情 (philia) であるが、『リュシス』は初期対話篇に典型的な“結論先送り”で終わることから、最も非生産的な対話篇に数えられるかもしれない。しかしそこにはいくつかの生産的な局面を確認できるのである。

『リュシス』はいわば序曲的な部分が長く、その内容が主題が論じられる脈絡に対して必然的な連関を見出すことは困難であることから、プラトンの作品の中ではその評価は高くないようである。とはいえこの作品では、ソクラテスが思考実験を重ね、対話相手の自己矛盾を突くだけでなく、この相手に真理への接近を促す様が、またそれ以上に自分自身がより高次の真理へ挑むソクラテスの姿勢が描かれている。

そもそも友愛・友情の本質を探究する場合、人間相互の関係がどのようになっているか、この関係がいかにあるべきかが検討されてしかるべきところである。なるほど『リュシス』の序論と本論で軽く触れられているが、友愛の“相互”的なあり方は主題となることはない。むしろ愛する (φιλεῖν) 側の φιλεῖν される対象に対する一方的な関係がほとんど議論の対象となっている。φιλεῖν は「愛する」、というより「求める」、「欲する」の意味合いが優勢となる。

本論の第一の議論 (212a–213d) 見てみよう。ソクラテスが提示した最初の問い (212a–b) は以下のような選言的なものである。

1. 「愛する者」(能動の分詞 φιλον が使われている) が「愛される者」(受動の分詞 φιλούμενος) の「友」である。
2. 愛される者が愛する者の友である。
3. これら 1 と 2 との間には違いはない

普通、すでに述べたように、人間同士の友愛関係には“相互”的な交わりが前提とされているので、これらの選択肢自体、不自然と思われる。お互いに腹藏なく話が出来るとか、互いに助言したり助けたり出来る、といった関係のゆえに互いに友となる、といった事柄が議論の対象となるわけではない。単に打算的な友達関係は長続きしないとか、友情とは必ずしも互いに“益になる”如何を問わず、人格同士の絆から成り立ちうる、といった論議もされることはない。

さて上の選択肢すべてが論駁されるわけであるが、2. の選択肢がどのように斥けられたかを検討しておこう。というのもこの選択肢のみが後の議論で無批判に前提とされ、議論が展開されているからである。その骨子を述べれば、愛される“対象”（あえてこのように表現するのが適切と思われる）から愛し返される (αντιφιλεισθαι) どころか、憎まれていることもありうるので、いわば“片思い”的対象を「友」とみなすことは不合理である、というものである。自分を憎む者を、つまり敵を愛することは、そもそも「愛する」という言葉の意味に反する、というわけである。この場合、相手から敵対行為を受けたり憎まれたりしない限り、愛される対象は「友」とみなすことが可能である、という合意は得られたはずである。そして実際のところ、最後の論議で友はこのような対象として前提とされる。しかしここでこのような場合わけはなされることなく、論議打ち切りとなった。

次いで或る者が他者を友達とするには、前者が後者を愛するだけでなく、他者からも愛されることが必要である、との合意が一たびなされるも、その直後とたんに φιλεῖν が人間以外の“対象”にも適用される。犬や酒、運動競技、知識

を友とする場合、これらから愛し返される (αντιφιλεισθαι) わけではないので、友の関係が成立しなくなるとされ、この合意が否定されて、議論は暗礁に乗り上げる。アポリアに陥った理由が探られることもなかったので、この第一の議論は、「友」の多義性が浮上した以外、生産性を見ることがなかった。

ここには明らかにソクラテスの強引とも言える自説への誘導が見て取れる。φιλεῖν という動詞の多義性を利用しながら、人間同士の情愛関係の次元を捨象して、彼は一義的に「求める」または「欲する」の意味に限定することになる。或る人間が他の人間を「愛する」という意味の φιλεῖν は考察の対象外となる。常識のレベルでも次のような意見が差し挟まれたであろう：或る人にとって運動競技や知識が「友」と比喩的に言われるにしても、或る者が他の人間を愛する、または「友」とする、という場合では、「愛する」または「友」の意味が区別されて用いられている、と。しかしこのような区分けの議論は俎上にのらなかった。

似たもの同士が友とされるかという第二の論議、逆に相反するもの同士が友とされるのか、という第三の論議で、それぞれがアポリアで終わることになるが、次の「第一の友」(το φίλον πρῶτον) の論議まで読み進めると、ようやくソクラテスの戦略が見えてくる。「友」は求められるべき善きもの、自分に帰属していたが失っていた、回復すべき (善き) ものとされる。το φίλον は中性名詞であるが、中性名詞であるがゆえに「友」はおよそ人間関係における友愛とはまったく別のものとして論じられることになる。

対話はソクラテスの導きにより、次のように進められる：ひとがあるものを友として求めるのは、たとえば病気のゆえに健康のために (δια νοσον ἕνεκα ὑγείας) 医者を友とする (医術を求める) — このあと「健康」そのものが善きものとして「友」とされ、議論が錯綜する (219a) —。一般化されて「何か (善いもの) のために何か (悪いこと) のゆえに」(ἕνεκα του δια τι) 人は求

めるのであるが (218d)、この何か善きもの (たとえば健康) は、別の何か (上位の) 善きもの (友) の「ために」(ἕνεκα) 求められるはず、とされる。具体的により上位の善きものにプラトンは言及していないが、たとえば仕事をして稼ぎ家族を養う、といったことが挙げられよう (cf. Bort 200)。より下位の善きものは手段の地位に格下げされ、さらに上位の善きものに遡源され、これ以上遡ることのできない「第一の友」(πρῶτον φίλον) が「始原」(ἀρχή) として得られることになる (219c f)。

この始原としての友が魂の幸福な状態なのかどうかプラトンは明示していないが、ソクラテスの対話により相手 (メネクセノス) は少なくとも善の階層的な上下関係に思いを致すことができたであろう。したがって少なくともこの「第一の友」の議論には一定の生産性が確認できる。

3.2 『ゴルギアース』に見る思考実験

「通念」(ἐνδοξα) を重んじるアリストテレスにしてみれば、ソクラテスの思考実験はしばしば通念に反するものと映ったのであろう。特に典型的な“ソクラテスの逆説”である「悪は不本意」説に対して、周知のようにアリストテレスは批判することになる⁷⁾。本稿ではこの批判に立ち入る暇はないが、この逆説によりソクラテスが人びとにいかなる点に関して目覚めさせようとしたのか、を中心に考察してみたい。

『ゴルギアース』に登場する主要人物の一人、ゴルギアースはシチリア島のレオンティーノイの人で外交使節としてアテネを何度か訪れている、いわば外交官であった。プラトンは彼のことを「レオンティーノイのソピステース」(Λεοντινος σοφιστης, Hipp. ma. 282b) と呼んでいるが、ソクラテスが敵視した狭義のソピステースではなく、そこでは「賢者」ぐらいの意味で語られていると思われる (cf. Dodds, 6 f)。その話術・弁論の才は「神とも見紛う話術の才の持ち主」(δαιμονος λεγειν) として、またその術の職業的教師として讃えられていた (Symp. 198c; Meno 95c)。

ゴルギアースは「法廷にあっては陪審員たち

を、評議会にあってはその議員たちを、民会にあってはその出席者たちを、．．．説得することが出来ること」が弁論の術であると公言しているが (Gorg. 452e)、その背景には、彼自身アテネでその弁論術により人々を実際に説得することに成功したという事実があったと考えられる⁸⁾。ゴルギアースは自分の弁論術を以ってすれば、国政をも動かすことが出来るという自負があったのであろう。

弁論術の危うさを指摘しようとしたのはソクラテスだけではない。トゥーキューディデースはしばしば直接話法でポリスの方向を決定付けるような演説をその歴史書に載せている。たとえばアルキビアデース（主戦派）とニーキアース（和平派）との論戦では、前者の巧みな弁舌で後者の慎重論が退けられることになった⁹⁾。まだギリシャ本土での戦いが終結していないのに、大軍をシチリアまで遠征させることの危険性を冷静沈着に主張するニーキアースの見解が、無謀とも言える主戦派の意見に屈し、アテネは破局的な局面を自ら招き入れることになった¹⁰⁾。

「弁論術」の本質についてはソクラテスとポーロスとの論議に引き継がれるが、出された結論は、それは多数者に対する「へつらい」（おべっか *καλακεια*）に過ぎないというものであった¹¹⁾。多数からの賛同を得なければ前に進まない民主制の危うさをソクラテスは何度も指摘するが、この体制で「力」のあるとされる弁論術がこの危うさを生み出したし、これからもそうするであろうことを懸念していたわけである。

弁論術の何たるかについての議論が一定の決着を見た後、話題は正義とは何かという問題に切り替わっていく。とはいっても、それは、弁論術が他の専門家よりうまくやっただけのことが出来るといったゴルギアースの主張 (Gorg. 456a ff.) や、弁論術は僭主のように「大いに力がある」 (*μεγα δυνασθαι*, Gorg. 466e) といったポーロスの主張を受けてのことである。何でも望みどおりできる、たとえば誰かを不正に逮捕したり、処刑したりすることもできる、といった点についてソクラテスの吟味が始まる。

主題は「悪」、「悪いこと」を意味する *kakon* (*κακον*) をめぐって展開され、かの有名なソクラテスの逆説、「悪は不本意」で頂点に達すると考えられる。

さて、この『ゴルギアース』で、我々の調べた限りでは、128 の *kakon* またはその派生態が見出される。一部の副詞 (*κακως*) を除けばほとんどが中性名詞 (*kakon*, *kaka*) として登場する¹²⁾。「悪い」という日本語がさまざまな意味を持っているように、ギリシャ語の *kakon* も多義的で、「役に立たない」、「有害な」、「道徳的に醜い」、「苦痛を伴う」など、この対話篇でもそのつどの文脈に応じて、意味を区分けすることが出来るが、ソクラテスはおそらくは意図的にこの区分けを無視して論議を進めていると考えられる。つまりこのような差異を抽象しているわけで、ここにこそソクラテスの思考実験の意図があると考えられる。このような抽象により、当然ながら、対話者とのずれが生じるわけであるが、このことも計算済み、といった風にソクラテスは議論を先導していく。

その典型例が「悪いこと」すなわち「醜いこと」 (*αισχρον*) とソクラテスがゴルギアースに宣言しているところ (Gorg. 463d)、「立派なこと」 (*καλον*) すなわち「善いこと」、逆に「悪いこと」すなわち「醜いこと」とソクラテスがポーロスに同意を求めているところである (Gorg. 474d)。ゴルギアースもポーロスも少なくとも最初は即座に同意を拒否している。「醜さ」を明らかに道徳的な意味に限定して彼らは理解しているからである。

これらのことを念頭において、最後にいわゆる「ソクラテスの逆説」を検討しよう。人は「進んで（それと知っていて、故意に）悪を行う（不正を行う）ことはない」 (*‘εκων αδικειν*)、言い換えれば、人は「それと知らずに（不承不承）悪を行う」 (*ακων αδικειν*) というのが逆説の命題である。これは、われわれは「どんなにしても故意に不正を行ってはならない」 (*ουδενι τροπω φαμεν ‘εκοντας αδικητεον ειναι* ; Crito 49a) という道徳的責務を課す命題とは異なる。この

逆説が明白な形で表明されるのは、カリクレースが議論に嫌気が差して、ソクラテスが実質的にモノローグの形で自説を展開する箇所においてである (509e)。カリクレースは生返事を返すものの、ソクラテスの命題をまともに受け取っていない。

この逆説は実はゴルギアースとの論議の中で (460b ff.)、さらにポーロスとの対話において表明されていた (475e)。前者の議論はゴルギアースの自己矛盾を突く目的でソクラテスが主導したもので、この逆説の内奥に迫るものではなかった。後者の論議はより錯綜しているが、中性名詞の「悪」が用いられることにより現実の「悪」との対応関係があいまいになるばかりか、“何にとって”、あるいは“誰にとって”という視点が捨象されることになる。そこでこれらの箇所を検討してみよう。

まずソクラテスはゴルギアースに対してこう切り出す：「建築のことども」(τεκτονικά)を学んだ者は建築家になる；同じく医術を学んだ者は医者になる；「同じ論理で」(κατά τούτον τον λόγον)正しいことどもを学んだ者は正しくなる(ὁ τα δίκαια μεμαθηκώς δίκαιος [ἐστίν])ことになる (460b – c)。ゴルギアースはすべて肯定的にソクラテスの論議に同意を与えたために、彼自身アポリアに陥ることになる。最後の命題に関してさまざまな反論が可能であったのは明らかである。そもそも「正しいこと」は一種の技術ではない¹³⁾；あるいは正しいことを学んだ者は同時に不正の何たるかについても学んでいるはずである、したがって云々；「美しいこと」の何であるかを学んだ者は必ずしも美しくなるわけではないように、同じことが正しさについても言える、などなど¹⁴⁾。

次にポーロスとの議論に移ろう。ここで頻出する κακόν という言葉は文脈の上で「有益」(ὠφέλημα)の反対の意味に限定されている (474e)。つまり損失、損害、有害といった意味合いをそれは帯びることになる。そしてここでの論議の暗黙の前提は、人は誰であれこのような悪を避け斥けようとする、というものである。誰もこ

のような悪を“自分に”招こうとはしないもの、というのは自明の理とされている。ところが議論が進展する中で“誰にとって”悪が招来するかは不明となってくる。ここにソクラテスの戦略が潜んでいると考えることもできる。

さてそもそもポーロスは、弁論に優れたものが人々を説得して国を動かしたり、法廷で相手を言い負かして有罪にしたり国外追放にしたりすることができるほどの力を持っている、というゴルギアースの見解を当然の理としてソクラテスと議論を開始している。「悪」は言い負かされるほうに、「善」(利益)は言い負かすほうに招来するということになる。ポーロスはしかしながら議論の中でこの主張を貫徹できず、自説を撤回せざるを得ないことになった。具体的には「不正を加える」ほうが「不正を被る」より「悪」の点でまさっていて、したがって前者のほうが「より悪い」(κακίον)ということポーロスが同意したためにである (Gorg. 475c)。ここで不正を加えるほうは、自分の側には益をもたらす、相手側に害悪をもたらすという事実がある、ということ彼は主張し切れなかったのである。ここの議論で“誰にとって”ということにまで踏み込まなかったことでポーロスが折れる形になったのである。しかし結論においてソクラテスは、誰も“自分に”「より大きい悪」招く者はいないという常識的な前提を復活させ、逆説的命題、すなわち「自分が不正を受けるよりも不正を加えるほうをとる者は誰もいない」という命題が是認されることになった (Gorg. 475e)。

『ゴルギアース』においてそのほかにも挙げればさまざまな思考実験が試みられたが、対話の主要な二人、ポーロスとカリクレースは結局のところ、弁論術は大きな力を持っているように見えても実際は力がないといったソクラテスの主張を、ましてや不正を被るより不正を加えるほうがより悪いといったテーゼを得心したとは考えられない。「悪は不本意」の逆説に至っては、まともに相手にされていない。

しかしながら強者の論理を主張していたカリ

クレースですら、あるべき国の指導者たちはより力のあるものたちであっても、同時に国家について思慮を持つ（φρονιμοί）ものでなければならぬことに同意している（491a f.）。しかしソクラテスが説得しようとしたもう一つのこと、つまり魂も思慮ある状態になければならないという主張に理解は示したものの、得心したとは考えられない。「悪」または不正の行使に関するの議論でソクラテスが目指したものは最終的に、魂からの悪の追放（Gorg. 477e）であったと考えられる。いわゆる「魂の世話」（cf. Apol. 29d）では不十分で、正しい者は現実の諸力に押しつぶされかねない、といった現実論的な見解をカリクレースは捨て切れなかったと考えられる。

第4章 教師ソクラテスの実像

ソクラテスが“覚醒”としての教育を提唱し、それを実践した教師であったことは定説になっているが、この覚醒が無知の自覚で終わるわけではないことは、これまでも見てきた。ソクラテスが日常的自明性から脱却して、低次の真理から高次のそれへと対話相手を、しかも自らをも導いていくとき、相手にまた自分に課した要求事項がいくつかあるが、二つだけ挙げてみる¹⁵⁾。

一つは、自分の意見に徹する。言い換えれば権威筋の見方を鵜呑みにしたり依拠したりしないこと、賢者の格言めいた言説を振りかざさないことが要求される。とりわけ、すくなくとも初期対話篇に頻出する「多数者」（οἱ πολλοί）という言葉には、“皆がそう考えているから”といった論法は通じない、といったことが含意されている¹⁶⁾。多数者の意見に拠らずして自分の頭で、自分の言葉で考え通すべし、ということになる。「自分で“これはこういうことだ”と言えるようになれば、そのとき最も納得したことになる」はずだからである（Alc. I 114e）。

第二の要求事項は、自分の意見に一貫性を貫くことである。ソクラテスはカリクレースに、誤った見解が反駁されないままにされれば、彼が

「自分に首尾一貫しないで」（οὐ σοὶ ὁμολογήσει）、一生涯不協和のままでいる（διαφωνήσει）ことになるだろうと警告を発するだけでなく、彼自身、多数のものの意見に合わなくとも構わないが、自分自身に調和しないことだけは望まないと持論を述べている（Gorg. 482 b–c）。このことは単なる論理的な自己矛盾の脱却をはるかに超えた次元にまで及ぶ。『弁明』でソクラテスは無神論の廉に関して告発者の論理的な矛盾をさらけ出したが、それ以上に法廷に告発することがなかった世間の“誹謗者”（κατηγοροί）¹⁷⁾のソクラテスに対する誤解を解消することの難しさを告白している（Apol. 18b f.）。世間の多数者は対話術の相手になりえないので、彼らを一貫した考えを持つように仕向けることはそもそも不可能である。それでも彼は裁判で、根深い偏見が優勢であった陪審員たちを相手に挑んだ。このような感情的な憎悪も絡むような問題 — 例えば正義と何かといった問題も含めて — について相手に一貫した見解を要求することは容易ではない。ソクラテス自身このことを最もよく承知していたことであろう。

さて、人々の間で真理と思われている事柄にもさまざまな次元があって、「正義とは何か」といった問題は解きほぐすのが極めて困難であることは『ゴルギアース』の論議が示しているとおりである。「強者の論理」こそが正義である、という見解は単なる「思い込み」、つまり簡単に論破されるような謬見ではない。このような見方に多くの人々が（声に出して賛意を表明しなくとも）与しているだけではなく、カリクレースが主張するように、この見解を裏付けることのできる、もっともらしい事実に根拠が提示出来るからである。このような難問解決のためにとった方法がソクラテスの思考実験である。具体的な事例から初めて合意を形成し、この合意をもとにさらに思考実験を重ねるという手法がとられる。時にはこの実験が暗礁に乗り上げることもあるが、その場合には前提を変えてさらに思考実験を繰り返し、新たな自明性を確保するわけである。

ソクラテスは（プラトンも）愛知（哲学）にかかわる問題はいわゆる“未決の問い”（*offene Frage*）であることを自覚していたし、最終的には未決着の問題に対して対話相手（あるいは読者）が自ら考えるように事をしつらえた、と考えることもできよう。真理は自分で掴むものであるから。

ソクラテスは、弁論家風の長広舌を控えるように相手に求め、一つ一つ合意を重ねて真理に接近する対話で議論を進めるが、ときとして相手が強弁してくる場合、一種の議論のための議論にも見える形で論駁することがあった。たとえば『リュシス』篇ではメネクセノスに対して、『ゴルギアース』篇ではポーロスに対してやりこめたように。しかしその対話の目指すところは、真理に対するいわば勇気を鼓舞し、相手が自ら真理を産み出すことにあったといえよう。たとえこの真理が途上のものであったとしても。

結語

村井実はずでに述べたように、ソクラテスの助産術の意義を高く評価しなかった¹⁸⁾。しかし『リュシス』篇においても、対話相手はプラトンの善のアイデアにまで迫るような思考の仕方を学んでいるし、『ゴルギアース』篇でも「強者の論理」の危険性を察知したはずである。それ以上にソクラテスは日常的な自明性からの脱却を促し、何らかの前提や仮説を設けて一つ一つ合意をしながら考え抜く愛知的精神を醸成することに努め、それに一定の成果が得られたといえよう。その成果の一つがプラトンという哲学者の誕生である。¹⁹⁾

ソクラテスの思考実験には、本文でも検討したように、“スキ”がなかったわけではない。これをプラトンの読者は容易に察知することができる場合もあったことから、ソクラテスまたはプラトンが故意にこのような“スキ”を対話相手や読者にそれと分けるようにしておいた、とも考えたくなる。あとは自分で考え抜くよう

に、と促しているようにも取れるからである。このようないわば“教育的配慮”がなされているとすれば、一層ソクラテスの教師としての偉大さが浮かび上がってくる。

注

- 1) 本稿最後に挙げた「原典の略号」および「参考文献一覧」を参照されたい。本文中またはこの「注」で参照・引用する場合一覧の略号と頁数を以て引用・参照箇所を示すことにした。原典はすべて Loeb Classical Library のものを参照したが、参考文献一覧にあるように、注釈書のテキストも参照した。諸種の邦訳も参照したが、いちいち典拠を示さなかった。なおギリシャ語の表記についてはアクセント記号は付さなかった。また氣息記号のうち帯気音についてのみの記号だけは付けた。
- 2) 陪審員の数については裁判の種類によって異同あり、ということがアリストテレスの『アテナイ人の国制』（岩波文庫）に書かれている。1000 人、あるいは 1500 人になることもあり、私的な訴訟の場合 201 人あるいは 401 人になることもある、とされている（文庫 p. 110, およびその訳注を参照されたい）。
- 3) Cf. Oxford Classical Dictionary, 3rd Edit. (1996, Oxford/New York), 'Law and Procedure, Athenian.'
- 4) 該当箇所 (Paedr. 266d–267c) には 9 名載っているが、主だった者を挙げれば、パロスのエウエーノス、シチリア島のシラクーサイとレオンティノーイ出身であるティシアースとゴルギアース、ゴルギアースの弟子、ポーロスはシチリア島のアクラガス出身、トラキア地方アブデラ出身のプロータゴラスである。なおこの対話編の影の主役、リュシアースも、その父がシチリア出身の海外居留民（メトイコイ）であり、リュシアース自身もアテネの市民権を得ていない。弁論家のほかにも外国から様々な人材がアテネに逗留・滞在していたことがグラントの歴史地図帳から知ることができる (M. Grant, The Routledge Atlas of classical History, ⁵ 1994, London, p. 37 f.). 彼らがアテネの伝統的な価値観や道徳観に直接・間接に影響を与えたことは間違いのないであろう。
- 5) Cf. Meno 82b ff.; 幾何学的真理を子供がソクラテスの「助産術」を通して自ら産み出すことが出来た。

- 6) この序論的な部分においてリュシスとの対話を通して一定の成果が得られている。つまり国の政治を人びとから任せられることが出来るのには、その道に関することどもについて「わきまえて」(ἐπιστάσθαι; φρονεῖν) いなければならぬ、と (Lys. 209c)。この後にもこのような「わきまえて」に関する表現が頻出する (φρονιμος; νοῦν κτασθαι; σοφος □; □ibid. 210a – b); プラトン哲学のキーワードが先取りされている感がある。Vgl. Bordt, 135, Anm. 315.
- 7) アリストテレス、『ニコマコス倫理学』, VII, ii, 1 ff.
- 8) トゥーキューデデースの歴史書にはゴルギアースの名前は出てこないが、故国のレオンティーノイがシュラクサーサイから圧迫を受けていたとき、使節団の長としてゴルギアースはアテネに援軍要請をし、説得に成功している (426 BC; Thuk. III, 86, 2 – 4)。またレオンティーノイがシュラクサーサイの支配下に置かれていたときも、祖国解放のためにレオンティーノイ人がアテネに支援を求める演説を行っている (415 BC; Thuk. VI, 19, 1)。ここでゴルギアースが演壇に立ったことは間違いないであろう。
- 9) アルキピアデースは（法廷）弁論の手順どおり演説が行ったと考えられる (cf. Horbl. III, 341)。具体的にはまず最初に相手からの誹謗中傷 (διαβολή); 『弁明』に頻出する語でもある) を根拠のないものとして「解消」(λύσις) することからはじめる、という常套手段がとられているのである。これについてはアリストテレスの『弁論術』(Rhetorikē, 1415a 28 – 34) を、またプラトンの『パイドロス』(Paedr. 266e ff) を参照されたい (Cf. Dalfen, 280 f.)。
- 10) シチリア遠征を促したもうひとつの要因があった。レオンティーノイからの援軍要請のほか、シチリア島の北西に位置するエゲスタ人からも同様の要請があり、その使節団がその演説でエゲスタから軍資金が十分供されると保証したため、アテネはシチリア遠征に大いに傾いた (Thuk. VI, 8, 1 ff.)。しかしこれが嘘だと分かったのは遠征開始後まもなくのことであった (VI, 46, 1)。エゲスタ人の演説内容が当てにならないことにニーキアースは気づいていたのである。
- 11) ソクラテスは弁論術をことごとく否定したわけではない。市民を善導するような「しかるべき弁論術」(ἀληθινή 'ρητορικὴ) があり得ることが彼自身によって表明されている (Gorg. 517e; cf. Dodds, 360)。『メネクセノス』篇ではソクラテス自身、弁論術の教えを受けた、とある (235e ff.)。
- 12) 副詞 (κακῶς) は 9 回出てくる。抽象名詞の κακία は 6 回、最上級の κακίστ- は 2 回だけであるが、「最も悪い魂」(φυλὴ κακίστη) と付加語の用法が一回 (477c)、もう一つは副詞の最上級 (κακίστα) で登場する (478c)。残りの 111 個の用例のうち「悪しき人間」、「悪しき快樂」という表現で付加語的な形容詞として 8 回だけ男性形、女性形が使われている。あとの 103 個はすべて中性形の語である。
- 13) 純粋に技術に関する知と道徳に関する知との混同については『小ヒippiアース』を参照されたい (Hipp. mi. 373c ff.)。
- 14) さまざまな反論の可能性に関してはダルフェンの注解を参照した (Dalfen, 222 f.)。この一連の議論が行われているところのテキストは、すでに合意されたことが反復されたりして、例えばクロワゼは 460c1 – 5 のやり取りをブラケットで括っている (Crois. 127)。「正しい人はしたがって決して不正を行わないことになる」(460c 3) という、このブラケット内のソクラテスの帰結文に対して、ゴルギアースが肯定の形（「必然的にそういうことになる」 ἀναγκη）で応じるのはいかにも不自然に映る。この断定的な肯定よりも、「そうかもしれない」(φαίνεται) といったあいまいな肯定のほうがふさわしいように思える。その他の異同についてはドッズを参照されたい (Dodds, 219 f.)。なおプラトン自身『小ヒippiアース』篇で、「進んで 'εἶκον' つまりそれと知っていて不正を行う場合と、それと知らずに (αἶκον) 不正を行う場合とを比較考察している (Hipp. mi. 372d, 376b)。これはソクラテスの逆説を否定するものである。
- 15) Scomicov の見解を参照 (Scor. 14 f.)。
- 16) プラトンの対話篇『アルキピアデース I』で、正と不正をアルキピアデースが誰から学んだかと聞かれて、「多くの人々から」(παρὰ των πολλων) 学んだ答えている。これこそ“日常的な自明性”の典型であるが、当然ながらソクラテスによって即座に論駁されている (Alc. I, 110d – 111d)。
- 17) 普通「告発者」を意味する κατηγορος をプラトンそこで (Apol. 18c) 意図的に使っているように思われる。つまりここでは表に出てこない、実際のところ告発状を提出しなかった隠然たる告発者こそが難敵だったわけである。具体的にはソクラテス自身が相手を言いくるめるような、あるいは弱い論を強い論に見せかけるようなソフィスト的な人物とされた点こそが、ソクラテスにとって弁明すべきことだったと考えられる。
- 18) 村井は「ソクラテスとプラトン — プラトンの作品について教育史の立場から両者を区別する試み — 」という論文で (『哲学』 vol. 35, 1958 年 11 月 (慶應大学) pp. 333 – 354)、初期対話篇におけるソクラテスの対話術は「助産的という

よりむしろ論破的」でしかなかった、とほとんど断定している (p. 342 f.)。

- 19) プラトンの対話篇に出てくる主要な登場人物の何人かは世間ではソクラテスの弟子と言われていた若者たちであるが、アルキビアデース、クリティアースなどは「魂の世話」を心がけるどころか自分の荣誉欲や支配欲に流されて暴君的な性格を示した人物である。プラトンはソクラテスの教育的営みが失敗に帰したと、ことさらに言っているように思われる。それに対してクセノフォーンはソクラテスが少なからず市民を墮落の状態から解放した、とその教育的営みを積極的に評価している (X-Mem. I, ii)。プラトンの（一見すると）否定的な評価に関してはスコットの論議を参照されたい (Scott, Chap. 5)。

原典の略号

- Alc. I. — Alcibiades (プラトンの『アルキビアデース I』)
 Apol. — Apologia (プラトンの『ソクラテスの弁明』、本稿では『弁明』とだけ記す)
 Crito — Crito (プラトンの『クリトーン』)
 Gorg. — Gorgias (プラトンの『ゴルギアース』)
 Herod. — Herodotos (ヘロドトス『歴史』)
 Hipp. ma. — Hippias major (プラトンの『大ヒッピアース』)
 Hipp. mi. — Hippias minor (プラトンの『小ヒッピアース』)
 Lys. — Lysis (プラトンの『リュシス』)
 Meno — Menon (プラトンの『メノーン』)
 Paedr. — Phaedrus (プラトンの『パイドロス』)
 Resp. — Res Publica (Platonis) (プラトンの『国家』 Πολιτεία ; J. Adams 校訂のテキストと注釈, *Plato : Republic*, 21963, London を参照した)
 Symp. — Symposium (プラトンの『饗宴』)
 Theaet. — Theaetetus (プラトンの『テアイテトス』)
 Thuk. — Thukydides, History of the Peloponnesian War (トゥーキューディデースの『戦史』)

- X-Mem. — Xenophon, Memorabilia (クセノフォーンの『ソクラテスの思い出』)

主な参考文献一覧

- Bordt — Bordt, Michel, *Platon Lysis, Übersetzung und Kommentar*, 1998, Göttingen (Lysis のドイツ語訳と注釈)
 Burnet — Burnet, John, *Plato Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, 1924, Oxford (Reprint) (プラトンの『エウテュプローン』、『ソクラテスの弁明』、『クリトーン』の原典テキストと注釈)
 Crois. — Croiset, Alfred, *Platon Oeuvres complètes*, vol. III, 3e Partie, *Gorgias / Meno*, texte établi et traduit par A. Croiset, 1984, Paris. (『ゴルギアース』の原典と仏語訳が併記されている)
 Dalfen — Dalfen, Joahim, *Platon Gorgias, Übersetzung und Kommentar*, 2004, Göttingen (Gorgias のドイツ語訳と注釈)
 Denyer — Denyer, Nicholas, *Plato Alcibiades*, edited by Nicholas Denyer, 2001, Cambridge (プラトンの『アルキビアデース I』の原典テキストと注釈)
 Dodds — Dodds, E. R., *Plato Gorgias, A revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford, 1959. (プラトンの『ゴルギアース』の原典テキストと注釈)
 Homb. — Homblower, Simon, *A Commentary on THUCYDIDES*, 3. vols., 2008, Oxford. (トゥーキューディデースの『戦史』に関する大部の注釈書)
 村井 — 村井実, 『ソクラテス』(上、下) 講談社学術文庫, 昭和 52 年
 太田 — 太田秀通, 『ポリスの市民生活』、河出書房新社, 昭和 50 年
 Scor. — Scomicov, Samuel, *Plato's Metaphysics of Education*, London/New York, 1988.
 Scott — Scott, Gary Alan, *Plato's Socrates as Educator*, 2000, New York.